

が2割を越えると、少なくとも女性教官の存在に違和感をもたなくなることだけは確かである。学問・研究分野での敢然たる女性差別の事実が存在する限り、女

性研究者の地位と身分を保障する場としての役割の一部を担う国立女子大学の存在意義は充分にあると思う。

1986年夏：パレルモ雑感

栗原尚子

昨年、8月上旬から10月中旬にかけて海外学術調査の研究分担者の1員として、バルセロナにて調査する機会をえた。2年目のスペインであったが、夏の地中海地域の混乱ぶりは想像はしていたもののこの期間に調査などできるものでないことを改めて実感した。関連研究期間は総て夏休み、街中は観光客でゴッタがえし、一体「観光」とは何なのか考えこんでしまうほどである。とはいうものの来年刊行されるスペイン統計書には、かく言う私も1トウリストとしてカウントされるのではあるが。また、スペイン人からみればヴァカンスもとらず働き続ける日本人の方がもっと想像できない代物であろう。

今回の共同調査は、シリア、エジプト、ギリシャ、ユーゴスラヴィア、イタリア、スペインに分かれてそれぞれの分担課題に取り組むものであったが、比較調査という点から各自の本調査地以外も訪れる機会が与えられた。私の場合はイタリア、シチリア島のパレルモであった。勿論、パレルモに行くのは初めて、一体マフィアの故郷はどのようなところか期待に胸ふくらませでの旅行であったが、行き着くまでがそうは簡単にいかないのが地中海世界、早速ローマ空港で全速力で走り回る結果となった。パレルモまでの国内便に乗り継ぐまで約2時間あったので、十分と思いきや、パスポートコントロールが長蛇の列、しかも遅々として一向に前に進まず、またおよそ待つことなどできない性格上の欠陥も加わってイライラ度はその頂点に達した。しかし、これには当然の理由があった。当時とみに爆弾テロが続発し、それに対する警戒が厳重になっていたのである。とくにローマはテロリストの拠点になっているともいわれ、従って南からの旅行者に対するパスポートチェックは徹底して行われていた。空港内を走り回った結果、こういうこともあるかと前の経験から機内持ち込みの荷物のみであったのが幸いし、ボーディングカードもなしでかなり強引に予定の飛行機に乗ることができた。乗り込んだものの不安になって思わず隣

の乗客に、「これパレルモにいくよね」と聞いた次第。

パレルモの第一印象は、スペインから外国に來たという実感がわかなかったことである。まるでスペインの南、アンダルシアにいるような錯覚におそわれた。パレルモがスペインの支配下にあったという歴史結果となった。パレルモはあるもののそれによるよりも「地中海世界」という共通性をむしろ感じさせるものであるのかもしれない。ここ14年間に渡って続けてきた我々研究会の共通テーマである。

パレルモは人口40万人の大都市であり、ここにはイタリアの栄光と衰退とが総て揃っているという。確かに栄光を物語る歴史的遺産は多い。しかし私の目を奪ったのは、この都市のかつての心臓、都心内部の崩壊ぶりであった。中心商店街の建物は、1階は商店として利用されているものの2階以上は人が住めないような状況になっている。崩壊にさらされたままの建物もある。地震等の災害によらずとも自然に都市がどうやって崩壊していくのかを目の当りに見る思いであった。しかし、この問題はなにもパレルモに限ったことではない。バルセロナにおいても都心再開発は問題になっており、また、バルセロナにて開催されたIGCではシンポジウムテーマ「地中海地域における歴史的都市の再開発」としてとりあげられた。ただ、バルセロナのように再開発のために公共投資がなされているところに比べると、パレルモでは計画はあるもののシチリア経済の衰退のために実現はさらに困難になっている。都心内部の崩壊に対して、郊外には中産階層の住宅地が拡大している。

シチリア経済の衰退を象徴するもう一つの出来事に遭遇した。81年の歴史を誇ったパレルモサッカーチームの解散である。巨額の借金をかかえ、その返済計画が不十分であることから、イタリアのナショナルリーグを除名された夜、街は怒れる若者であふれ、翌日も抗議のデモ隊で混乱した(物見高いというもう一つの欠陥からデモ隊の後をついてまわりましたが)。背後

には、サッカーといえばトトカルチョ、トトカルチョといえばマフィア、そしてマフィアに対する闘いが絡んでおり、決して借金だけの問題ではないというのが一般的な見解のようである。

シチリアはイタリアのなかでも経済的に低開発地域

に属している。しかし、このシチリアに農業労働者として多くチュニジアからの季節労働者が入り込んでいる。このような経済的格差が生み出す労働力移動の国際的連環は、国際的観光客の流れのベクトルとは逆の方向を示している。関心を持ち続けているテーマである。

地誌学情報システム

久保 幸夫

今、地理学のための研究システムを作ろうとしている。これは、地域に関するさまざまな形態の情報をコンピュータにいれ、自然言語、すなわち、日本語で検索することを目的としたものである。

私がこの数年、研究の中心としている地理情報システムの利用範囲はどんどん広がっていて、都市計画、森林管理、ガス管の配管管理などといった実務的な応用は進んできた。コンピュータメーカーや測量会社はこの分野に数百人のオーダーで人材投入をおこなっており、最近では大学にまでヘッドハンティングの手がのびており、ただでさえ少ない大学での研究者が減ってしまっただけでなく、また、困ったという複雑な心境である。だが、この成果のフィードバックが地理学に十分にされていないのが気がかりとなっている。もともと、地理情報システムの研究は地理学から始まったにもかかわらず、この分野では地理学者はマイノリティーになってしまった。環境問題にしろ、何にしろよく「地理学では昔からやっていた」という主張をするが、よその分野にとられてしまった後で言ってもゴマメの歯ぎしりでしかない。地理学の将来を考えたとき、地理情報を電子工学などの分野に明け渡してしまうのはしのびがたいものがある。さて、では地理情報の研究と地理学とをどう関連させてゆけばよいのだろう。

このためには、地理学研究者に地理情報処理に興味を持ってもらうことが必要である。このためにも、また、地理情報処理の新しい方法を考えるためにも地理学、特に地誌の研究に役立つような新しい概念に基づくシステムを作ることを計画した。幸いにも文部省の

補助金を得て一昨年から研究を始めることができた。どうやら概念がまとまり、メーカーの協力もあって技術的なメドもつきプロトタイプの試作にまでこぎつけた。

このシステムでは、大きな辞書を持ち、百科事典のように地域に関する情報をどんどん引き出せるというものである。例えば、「水害」といったキーワードから日本における水害分布図を数秒で描くなどということは朝飯まえのことである。また、「大塚」といったような地名をいれれば、その地図がでてくるといったことから始まり、要求に応じて人口、産業などのデータを様々な形で（グラフとか分布図で）表示したりする。それだけではない。道路のネットワークがデータモデルとして入っているので「春日から若荷谷まで」という指定をすると最適な経路を示すことができる。これではまだ芸がないので、数百メートルごとに写真を入れておけば、まるで映画のように風景の移り変わりを見ることができる。百聞は一見にしかず、という諺があるが、これをコンピュータで実現しようというわけだ。さらに、昔の地図や写真をいれておけば、明治の街を歩いた気分にもなれる。こういうシステムができれば、地誌学研究だけでなく、地理学教育や市民教育にも役立つであろう。

さて、ここでお願いなのですがこのプロトタイプに入れる写真、東京の、特に文京区の街頭の写真を捜しています。昭和50年以前の写真を必要としています。お手もたに写真がございましたらご提供ください。カラーでも白黒でも結構です。